

人参養栄湯を使いこなす ②

十全大補湯との違い(続)



入江漢方内科クリニック吉祥寺 入江 祥史

前回は、人参養栄湯とその類似処方である十全大補湯の使い分けについて、両者の出典である「和剂局方」の記載をもとにお話した。大雑把に言って、人参養栄湯のほうが長期にわたる疲労困憊により、すなわち高齢者により、ということであった。

今回はその続きで、構成生薬に着目してみる。

両者を表にしてみると次のようになる。

生薬	人参養栄湯 (g)	十全大補湯 (g)
トウキ(当帰)	4.0	3.0
シャクヤク(芍薬)	2.0	3.0
ジオウ(地黄)	4.0	3.0
センキュウ(川芎)	—	3.0
ニンジン(人参)	3.0	3.0
ビャクジュツ(白朮)	4.0	3.0
ブクリョウ(茯苓)	4.0	3.0
カンゾウ(甘草)	1.0	1.5
ケイヒ(桂皮)	2.5	3.0
オウギ(黄耆)	1.5	3.0
チンピ(陳皮)	2.0	—
ゴミシ(五味子)	1.0	—
オンジ(遠志)	2.0	—

一目瞭然だがかなり重複がある。このうち赤字で書かれたものが四物湯、緑字が四君子湯の原型である。それぞれ血・気を補う重要処方だ。ちなみに四物湯+“原型四君子湯”は八珍湯^{ほっちんとう}という。この“八珍湯骨格”が気・血をとともに補う。

十全大補湯は、八珍湯に、温めて血行を促進する桂皮と、気を補い汗を止める(固表止汗)黄耆とが配合され、八珍湯を強化したような処方になっている。一方の人参養栄湯は、“ほぼ十全大補湯”(川芎がない)に陳皮・五味子・遠志の3つが加入する。したがって、構成生薬の上からは、量の問題を無視すれば、陳皮・五味子・

遠志が両処方の違い、人参養栄湯と十全大補湯の使い分けのポイントとなる。

これらの生薬の作用を表にするとこうなる。

生薬	薬能
チンピ(陳皮)	脾の機能を補い、気の流れを改善する(理気作用)。水毒から生じる痰を解消する(化痰作用)。
ゴミシ(五味子)	主に肺に作用し、咳や汗を止める(収斂作用)。
オンジ(遠志)	精神を安定させ、認知機能を補強する(安神・醒脳開竅作用)。

ここで生薬の量も考慮すると、十全大補湯が純粋に補気+補血作用を持つのに対し、人参養栄湯はそれと比較して、

- ① 瘀血改善作用は若干弱い(川芎がない)。
- ② 脾を補い気を作り出す作用は若干強い(茯苓・白朮が多い)。
- ③ 水毒改善作用・痰を除く作用が強い(茯苓・白朮が多い+陳皮)。
- ④ 気道に作用する(陳皮・五味子)。
- ⑤ 脳機能により(遠志・陳皮*)。

*陳皮には最近、認知症にも効果がありそうだとの研究報告がなされている²⁾。

といえるだろう。

前回は、十全大補湯=老若男女の諸虚を治し、人参養栄湯=積勞虚損(高齢者)の慢性の冷え¹⁾を治す、というふうに述べたが、上の③~⑤に着目すれば、人参養栄湯は、認知力や消化力が低下し慢性呼吸器疾患を抱えた、冷えを訴える高齢者に良い、とイメージできるだろう。

(次号へ続く)

【文献】

- 1) 平田昌敬 ほか: 下肢の冷えに対する人参養栄湯の有用性の検討. 医学と薬学 73(1): 65-69, 2016.
- 2) 工藤千秋 ほか: アルツハイマー病の発症機構と陳皮の臨床応用~ADの発症・進展にミエリン損傷が関与する可能性 (<http://www.kampoyubi.jp/material/clinical/pdf/GR-127>).